

土方正志◎荒蝦夷

1962年、北海道生まれ。東北学院大学卒。『真田啓介ミステリ論集古典探偵小説の愉しみ』全2巻（フェアプレイの文学／悪人たちの肖像）が第74回日本推理作家協会賞〔評論・研究部門〕を受賞しました！ 本年も〈荒蝦夷〉の本にご期待を！ 昨年は2回の入院手術に青息吐息、それでもがんばる古本屋稼業、仙台路地裏〈古本あらえみし〉もよろしくどうぞ！

- ①『壁の向こうへ続く道』／シャーリー・ジャクスン（渡辺庸子訳）／文遊社／2750円
- ②『復讐の女／招かれた女たち』／シルピナ・オカンポ（寺尾隆吉訳）／幻戯書房／5280円
- ③『ノスタルジア』／ミルチャ・カルタレスク（住谷春也訳）／作品社／3300円
- ④『ムントウリヤサ通りで〈改装版〉』／ミルチャ・エリアーデ（直野敦訳）／法政大学出版局／2750円
- ⑤『十六の夢の物語』／ミロラド・パヴィッチ（三谷恵子訳）／松籟社／2090円
- ⑥『残酷物語』／ヴィリエ・ド・リラダン（田上達也訳）／水声社／3205円
- ⑦『黄色い笑い／悪意』／ピエール・マッコラン（中村佳子・永田千奈訳）／国書刊行会／4620円
- ⑧『小鳥たち マトゥーテ短篇選』／アナ・マリア・マトゥーテ（宇野和美訳）／東宣出版／2420円
- ⑨『燃える地平線』／橋外男／幻戯書房／3850円
- ⑩『探偵小説と〈狂気〉』／鈴木優作／国書刊行会／3850円

いやあ、2021年はホントに個人的にいろいろあって、なんだか落ち着いて本が読めませんでした。特にながーいの読むココロの余裕に欠けていたようです。『ユドルフォ城の怪奇』（作品社）も『人狼ヴァグナー』（国書刊行会）も読みたい読みたい、だけどいま手を出しても楽しめないかも、読み切れないかも、落ち着いたところで読み始めよう……と、思っているウチに暮れてしまいました。2022年のお楽しみにします。そんなこんなで今回のベストテン、短篇集が中心になったかも……なんていいながら、①は長編だったりするわけですが、シャーリー「魔女」ジャクスの唯一の未訳長編（それも長編第1作だそうです）の登場です。これをセレクトしていいものかどうか、ちょっと迷いました。というのも、おばけも幽霊もゾンビも吸血鬼も出てきません。事件らしい事件もさいごのさいごまで起きません。サンフランシスコ郊外のある通りに暮らす子どもたちとその家族の日常が淡々と綴られます。ところが、そこはさすがジャクスン・マジック、なにもないのがコワイのです、不気味なのです、不穏なのです。狂ってないのに、狂ってる。それは実は私たちも同じなのかもと思わせられて、いやはやジャクスンおそるべしです。②はアルゼンチンの作家の短編集。アドルフ・ピサイ・カサーレスの妻にして、ホルヘ・ルイス・ボルヘスの親友、ほとんどショート・ショートみたいな小品も含めてぎっしり詰まった幻想の宝石箱、東宣出版から出た短編集『蛇口 オカンポ短編集』と合わせて堪能しました。③は東欧ルーマニアから、ノスタルジーとはいいながら、東欧革命の激動をくぐり抜けたそれであってみれば、どこか現実を離れた夢幻にして残酷なはかなさが漂います。④は新刊ではありませんが「改装版」なのでお許しを願って、こちらもルーマニアから。幻想文学の匠にして宗教学者のエリアーデ、その世に知られた作ですが、はじめて読みました。このコワさもまたモノノケのそれではなく、政治や国家の不条理なコワさではあるのですが、唸りました。⑤はセルビア、あの『ハザール事典』（創元ライブラリ）のパヴィッチの短編集です。実は「ハザール」にはあまりノれなかった私も今回はやられました。⑥は『未来のイヴ』のリラダンの短編集、新訳が嬉しい「リラダン・コレクション」全3巻の第1弾。19世紀フランスの奇譚が酔わせてくれます。⑦はこちらも全3巻予定が楽しみな「マッコラン・コレクション」第1弾。いやはやなんとともに「笑い病」パンデミック小説と思ってすっかり騙されてはいけません。ハマったら既刊『恋する潜水艦』（国書刊行会）も、ぜひ。ぶっ飛びます。⑧はスペイン女性作家の短編集、優美に幻想的でありながら、現実の残酷と酷薄が胸に迫ります。⑨は我が偏愛の橋外男です。怪談好きには「返子物語」と「蒲団」が知られているのでは。桃源社「大口マンの復活」の一翼を担い、社会思想社「現代教養文庫」全4巻に中央書房「橋外男ワンダーランド」全6巻と、折々不意に世に浮上するフシギな作家、今回は「創作実話篇」の本書に自伝物語篇『世は如何にして文士となりしか』と満洲残影篇『皇帝溥儀』が続いて、好きモノには干天の慈雨となりました。そして⑩は、2021年は評論豊作の年ではと感じさせられながらも積ん読のままのもの多々あり、まずは本書を挙げさせていただいて、にしてもどうも2021年の私は「ラプラタ幻想文学」と「東欧の想像力」にしてやられたようです。さて、今年はどうな幻想にめぐり会えるか、楽しみです。

◎荒蝦夷の仕事 2021◎

『3653日目 〈塔短歌会・東北〉震災詠の記録』／〈塔短歌会・東北〉編／2970円

『百年の孤舟』／志賀泉／1980円

『杉村顕道作品集 伊達政宗の手紙』／杉村顕道／3300円

『震災学』vol. 15／東北学院大学／2200円

『佐左木俊郎探偵小説選Ⅱ』／佐左木俊郎／論創社／3740円

怪談&幻想文学 ベストブック 2021

植松靖夫（翻訳家／東北学院大学教授）＋東雅夫（アンソロジスト／文芸評論家）＋黒木あるじ（作家）＋土方正志（荒蝦夷）が、2021年の怪談幻想文学のベストブックをご紹介します！



植松靖夫◎翻訳家／東北学院大学教授

1953年、北海道生まれ。上智大学大学院博士後期課程修了。訳書にコリン・ウィルソン『人狩り 連続殺人犯を追いつめろ！』（悠書館）、アルジャーノン・ブラックウッド『心霊博士ジョン・サイレンスの事件簿』（創元推理文庫）、アレクスター・クロウリー『麻薬常用者の日記』（国書刊行会）など。

- ①『骸骨 ジェローム・K・ジェローム幻想奇譚』／ジェローム・K・ジェローム（中野善夫訳）／国書刊行会／4180円
- ②『人狼ヴァグナー』／ジョージ・W・M・レノルズ（夏来健次訳）／国書刊行会／5280円
- ③『ユリイカ』2021年10月臨時増刊号「総特集＊須永朝彦——1946-2021」／青土社／2200円
- ④『テムズ川の娘』／ダイアン・セッターフィールド（高橋尚子訳）／小学館文庫／1540円
- ⑤『フィッシャーマン 漁り人の伝説』／ジョン・ランガン（植草昌実訳）／新紀元社／2200円

①作者は一般には専らユーモア小説『ボートの三人男』で知られ、読書家でもせいぜい、その続編の小説とエッセイ集、自伝を知っている程度ではないだろうか。こんな見事な作品の数々を遺していたとは私には初耳だ。本書には17編の怪奇小説やファンタジーの類が収められており、ジェロームらしいユーモアを感じさせる作品もあるが、それぞれ独特の雰囲気を出し、読者を異次元の世界へと誘い、もてなしてくれる。ちなみに『ボートの三人男』（中公文庫）は丸谷才一訳で楽しまれた読者が多いと思うが、あの翻訳には「訳し忘れ」による約1ページの欠落がある。②作者はイギリス・ヴィクトリア時代の大衆小説家。当時は多作（中には200冊を超えるとも云われるほど多作）の作家が何人もいたが、今は名前さえ忘れ去られてしまった者ばかりで、レノルズはその代表と云える。週刊で発行されることが多く、話が面白くなければたちまち読者に見放される時代だったから、本書も読者の注意を引きつけてやまない展開になっている。小説としての藝術的完成度は高くないのに、600ページを優に超える分量を感じさせないのは職人技で見事だ。16世紀初めのドイツの「黒い森」から始まる「ゴシック小説」を十九世紀の読者になったつもりで楽しんでいただきたい。③須永朝彦の愛読者は多くの場合、歌人として認識し評価しているのではないだろうか。私には「正漢字・歴史的假名遣ひ」を守る同志としての共感と親しみがある。2021年には『須永朝彦小説選』（ちくま文庫）も刊行されており、「ベスト5」の例年のパターンなら、この文庫本を入れるのが筋なのだが、今年5月に他界したので哀悼の意をこめて、彼の幻想的な作風のみならず、須永朝彦本人について少しでも多くの読者に知っていただいた上で、『須永朝彦小説全集』（東雅夫・解題：国書刊行会）をはじめ、数はそう多くない作者の世界の門をくぐるための案内書として敢えて本書を推薦したい。④19世紀イギリスを舞台にした小説で、幻想的なミステリ。テムズ河畔の古い居酒屋で常連たちが「物語」を紡ぎあって興じていると、突然、少女の屍体を抱きかかえた泥と血にまみれた男がよろめきながら入って来た。その少女はしばらくすると息を吹き返す。さてその子の正体は？ そもそも本当に死んでいたのかどうか。ネタバレにならないように、面白さのポイントを紹介するのがきわめてむづかしい話だ。⑤2016年ブラム・ストーカー賞長編賞受賞作。大手出版社の編集者だった訳者がみせる怪奇幻想文学分野での編集者・翻訳者としてのこの数年の活躍はめざましい。〈モダンホラー〉と云ってもじつは共通性があるようでない。それぞれが異色の存在感を示しているのだが、本書はスティヴン・キングの流れを汲む文学的な香りを漂わせ、キングはもちろんH・P・ラヴクラフトや正統派アメリカ文学を水源（まさにアメリカ小説は海と川を資源としてきた）として、謎の「釣り人伝説」に絡め取られていく二人の男をめぐる物語。

東雅夫◎アンソロジスト／文芸評論家／おばけずきネットワーク代表

1958年、神奈川県生まれ。早稲田大学卒。著書に『遠野物語と怪談の時代』（角川選書／日本推理作家協会賞）、『クトゥルー神話大事典』（新紀元社）、編纂書に、「文豪ノ怪談ジュニア・セレクション」（汐文社）、「文豪怪異小品集」（平凡社ライブラリー）、『文豪たちの怪談ライブ』（ちくま文庫）など。

- ①『残月記』／小田雅久仁／双葉社／1815円
- ②『平井呈一 生涯とその作品』／荒俣宏編（紀田順一郎監修）／松籟社／2640円
- ③『姫君を喰う話 宇能鴻一郎傑作短編集』／宇能鴻一郎／新潮文庫／737円
- ④『星巡りの瞳』／松葉屋なつみ／創元推理文庫／1034円
- ⑤『高丘親王航海記』（全4巻）／近藤ようこ（澁澤龍彦原作）／KADOKAWA／各880円
- ⑥『ユリイカ』2021年10月臨時増刊号「総特集＊須永朝彦——1946-2021」／青土社／2200円
- ⑦『ユドルフォ城の怪奇』（上・下）／アン・ラドクリフ（三馬志伸訳）／作品社／各3960円
- ⑧『骸骨 ジェローム・K・ジェローム幻想奇譚』／ジェローム・K・ジェローム（中野善夫訳）／国書刊行会／4180円
- ⑨『幻妖能楽集』／波津彬子（山内麻衣子監修）／KADOKAWA／1100円
- ⑩『クダン狩り——予言獣の影を追いかけて』／東雅夫編著／白澤社／1870円

いやはや人間、還暦を過ぎると何があるか分かりませんな。晴天の霹靂のごとく、この春、突然の入退院騒ぎに見舞われた。即刻、脳外科の病院で精密検査……まあ、いまだに生きているということは、そんなにたいしたことはなかったのかも！？（連載時評の初の休載は残念！）しかしあそこは妙な病院だった。あとで加門七海さんと電話で話していたら「あそこはね……歴史の古い病院でね……」。おいおい～そこから先が気になるぞー！（笑）自分のことはともかく、去年は『幻想文学』でお世話になった須永朝彦さんはじめ、意想外の訃報も相次ぎ、端的に云って「悪い年」だったと思う。今年が良い年にしたいものですな、皆の衆！

さてベストテン、❶は年間ベスト級の傑作中短篇集ながら、出た時期で損をした作品。しかし小田さん、あの『よぎりの船』といい、凄い作品を書きます。注目株の筆頭！ ❷は怪人アラマタが執念の博搜ぶりで、お師匠さんたる平井呈一翁の知られざる半生を調査し、まとめあげた労作である。紀田順一郎氏による序文がまた、とても良い。❸は、よくぞこんなヘンな小説集を、あの新潮文庫が出したのものよ……と、しばし感慨にふけた異色作。とりわけ表題作は、人肉食嗜趣味が横溢する怪作である。エロ作家だと舐めてかかると痛い目に遭いますぞ。❹は創元ファンタジィ新人賞を受賞した新鋭の受賞後第一作。架空の王朝を舞台とする、浮世離れした綺譚。〈鬼〉が重要なテーマとなっている点、例の『鬼滅の刃』的な関心で読んでも意義がある。後半の展開は、汎アジア的な物語の広がりを見据えて、ちょいと『高丘親王航海記』的でもある……と解説に記したら、なんと「ピンゴ！」だったようで、嬉しい驚きだった。で❺は、ついに全4巻が完結した、近藤ようこによる『高丘親王』のコミカライズ。例の〈虎〉が大活躍するラスト・シーンの迫力たるや！ こうやって、若い書き手たちによる物語の継承が進められるのは、素晴らしいことだと思う。澁澤龍彦は死なず。七十代前半の若さで逝った須永朝彦の遺産もまた、❻のような形で後世に伝えられてゆくのだろう。❼はついに邦訳された伝説の大長篇。❸は好事家ならではのマニアライクなセレクションが光る。共に版元ならではの好著好企画。❹は目で観る能楽入門に最適の好著。久方ぶりの拙著たる❿を付け足し！

◎東雅夫の仕事 2021◎

『怪談えほん いただきます。ごちそうさま。』（怪談えほん 13）／岩崎書店／1650円

『怪談えほん おめん』（怪談えほん 14）／岩崎書店／1650円

『魔軍跳梁 赤江瀑アラベスク2』／創元推理文庫／1540円

『妖花燦爛 赤江瀑アラベスク3』／創元推理文庫／1540円

『刀 文豪怪談ライバルズ！』／ちくま文庫／1100円

『鬼 文豪怪談ライバルズ！』／ちくま文庫／1210円

『文豪怪奇コレクション 恐怖と哀愁の内田百閒』／双葉文庫／825円

『文豪怪奇コレクション 耽美と憧憬の泉鏡花〈小説篇〉』／双葉文庫／935円

『文豪怪奇コレクション 綺羅と艶冶の泉鏡花〈戯曲篇〉』／双葉文庫／1100円

『クダン狩り——予言獣の影を追いかけて』／白澤社／1870円

『幻想童話名作選 文豪怪異小品集・特別篇』／平凡社ライブラリー／1870円

『文豪山怪奇譚 山の怪談名作選』／ヤマケイ文庫／770円

『ふしぎな話 小池真理子怪奇譚傑作選』／角川ホラー文庫／748円

『おのみち怪談2』／本分社／550円

黒木あるじ◎作家

1976年、青森県生まれ。東北芸術工科大学卒。2009年に第7回ビーケーワン怪談大賞で佳作、第1回『幽』怪談実話コンテストで「ブンまわし賞」を受賞。著作に『葬儀屋（アンダーテイカー）プロレス刺客伝』、『小説 ノイズ【noise】』など。来年もいろいろ書きます。出ます。がんばります。

- ①『魔軍跳梁 赤江瀑アラベスク2』／赤江瀑（東雅夫編）／創元推理文庫／1540円
- ②『須永朝彦小説選』／須永朝彦（山尾悠子編）／ちくま文庫／946円
- ③『山の人魚と虚ろの王』／山尾悠子／国書刊行会／2640円
- ④『高原英理恐怖譚集成』／高原英理／国書刊行会／3960円
- ⑤『〈怪異〉とナショナリズム』／茂木謙之介・小松史生子・副田賢二・松下浩幸編著（怪異怪談研究会監修）／青弓社／4180円
- ⑥『ゴーストランド 幽霊のいるアメリカ史』／コリン・ディッキー（熊井ひろ美訳）／国書刊行会／3960円
- ⑦『列伝体 妖怪学前史』／伊藤慎吾・氷厘亭氷泉編／勉誠出版／3080円
- ⑧『クダン狩り——予言獣の影を追いかけて』／東雅夫編著／白澤社／1870円
- ⑨『死人街道』／ジョー・R・ランズデール（植草昌実訳）／新紀元社／2200円
- ⑩『ねなしがみ もの久保作品集』／もの久保／小学館集英社プロダクション／2750円

前回「現実が苛烈なほど怪奇幻想文学の需要は高まる」と無根拠な説を開陳した私。そんな戯言を証明するように疫禍続く2021年も傑作ぞろい、寿ぐべきか憂うべきか複雑な心境である。「2022年こそは光あれ」と願いつつ10冊を選出。先ずは学生時代『鬼会』（講談社文庫）で衝撃を受けた赤江瀑。没後10年を前に東氏編「アラベスク」シリーズで新たな読者を獲得したのは喜ばしいかぎり。全3巻いずれもオススメなれど、今回はひときわ幽玄な①をチョイス。❷は、やはり学生のおり『就眠儀式』（名著刊行会）で出逢った須永朝彦の小説集。耽美の極みと称すべき作品群のなかにあって、掉尾を飾る「青い箱と銀色のお化け」のまあ楽しいこと！ ぜひ『ユリイカ』2021年10月臨時増刊号（青土社）と一緒に。❷の編者も務めた山尾悠子の❸、美しい文章に耽溺する悦びを堪能させてくれる逸品。しかし、毎年のように氏の新作が読めるとは凄い時代だ……。❹は幻想文学新人賞受賞で澁澤・中井に見出された著者の〈恐怖〉に特化した選集。『抒情的恐怖群』（毎日新聞社）収録作との再会が嬉しい。怪談実話好きなら「町の底」は必読。❺は日本の国粹主義と怪異にまつわる論考集。二・二六事件に関与した青森出身の将校と巫俗の関わりを考察する一編が興味深い。数多の幽霊譚からアメリカの文化背景を紐解く❻と併読すれば、よりいっそう楽しめるのでは。❼は、アカデミックな研究対象となる以前から妖怪に取り憑かれていた人々を紹介するクロニクル。山田野理夫や「お化けを守る会」など〈みちのく怪談の先達〉も多数登場。東北民は読むべし！ 人面牛身の幻獣「クダン」の軌跡を追う⑧は、久々に東雅夫氏がフィールドワーカーとしての本領を発揮。『ムー』連載「日本伝説紀行」の興奮がよみがえる労作。⑨は、プレスリーやケネディー（と思いきこんでいる老人）がミイラと戦う名作「パパ・ホ・テップ」の作者らしいウェスタン・ホラー。全編に漂うペシミズムと、それを台無しにするバカな（賛辞です）設定にシビれる。⑩は巨大生物を描いてきた新進気鋭のイラストレーターによる画集。牧歌的な風景にまぎれこむ異形たちのなんと畏ろしくも懐かしいことか。

◎黒木あるじの仕事 2021◎

『瞬殺怪談 死地』／竹書房怪談文庫／748円

『未成仏百物語』／竹書房文庫／748円

『奥羽怪談』／竹書房怪談文庫／748円

『実録怪談 最恐事故物件』／竹書房／1430円

『黄泉つなぎ百物語／竹書房』／1650円

『怪談四十九夜 地獄蝶』／竹書房怪談文庫／748円

『狩りの季節 異形コレクションLII』／光文社文庫／1100円

『黒木魔奇録 魔女島』／竹書房怪談文庫／748円

『小説 ノイズ【noise】』／集英社文庫／638円

以下雑誌掲載……………

「神童」／小説宝石 2021年2月号

「春と殺し屋と七不思議」／小説宝石 2021年7月号

「いくなのみち」小説宝石／2021年8月号

「解決」／小説宝石 2021年12月号